

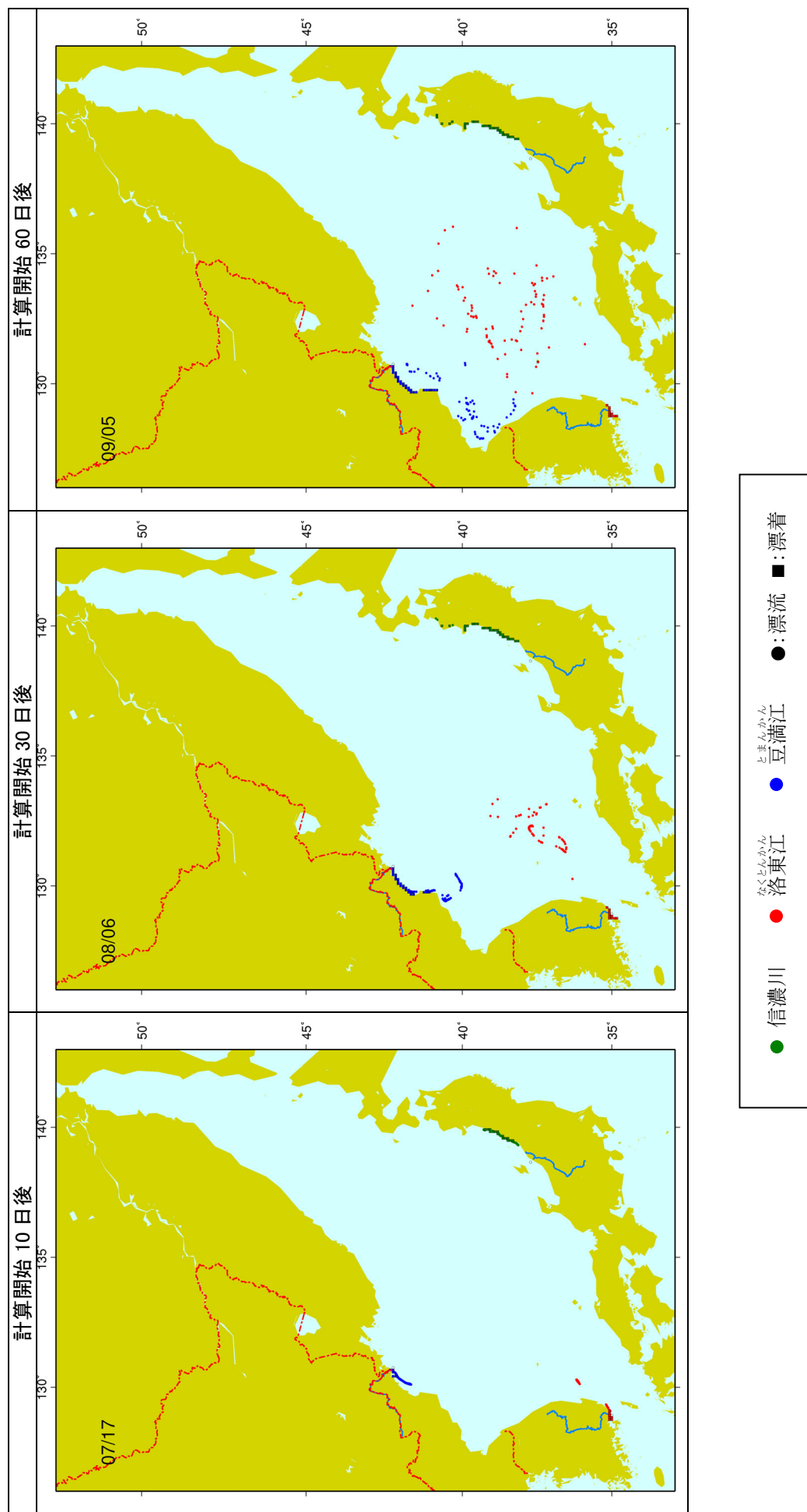


図-2.36(3) 河口流出を想定したゴミの漂流・漂着分布(2006 年出水時、ケース 2 空中:水中=1:2、計算開始から 10 日～60 日後)

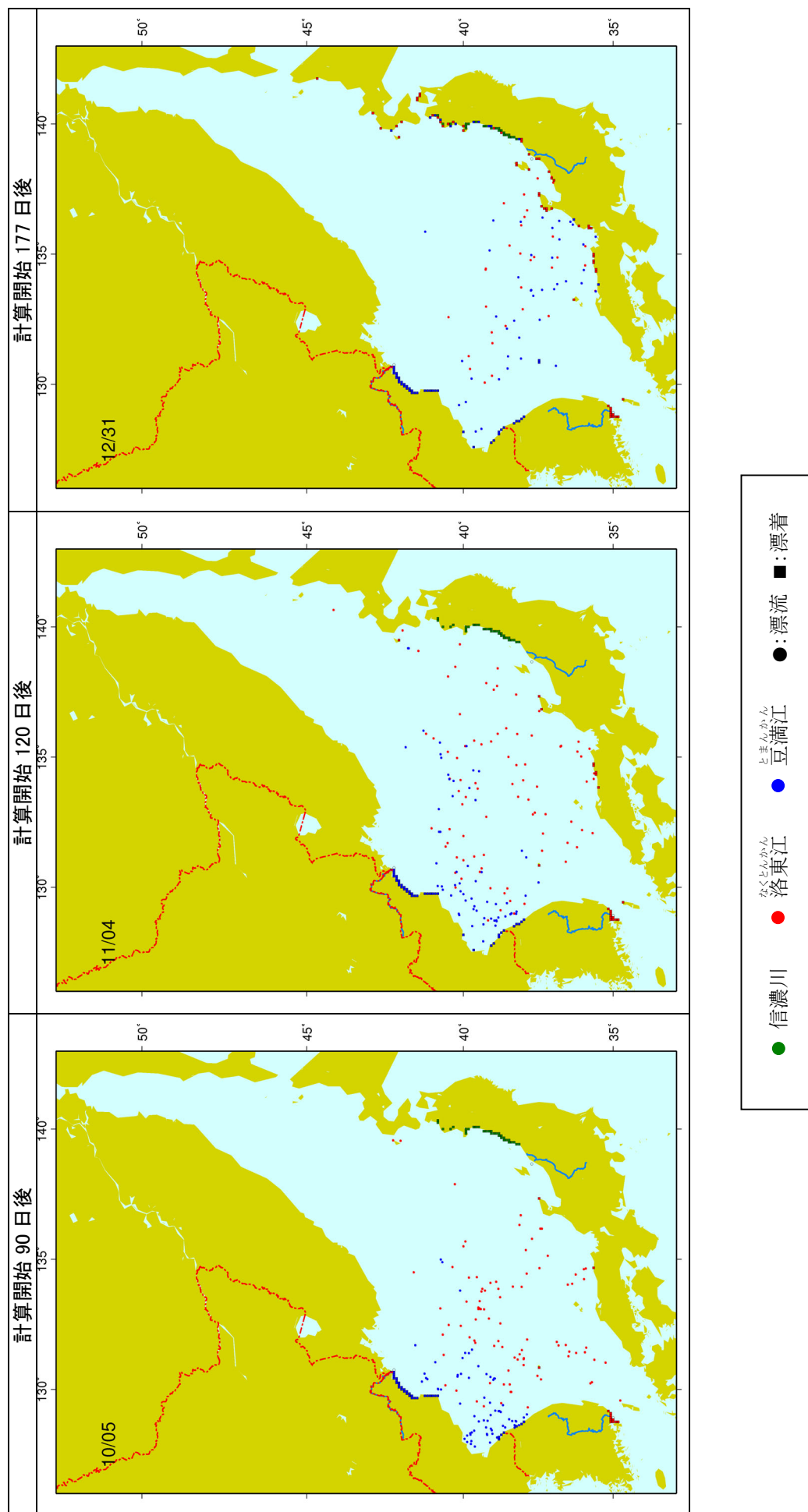


図- 2.36(4) 河口流出を想定したゴミの漂流・漂着分布(2006 年出水時、ケース 2 空中:水中=1:2、計算開始から 90 日～177 日後)

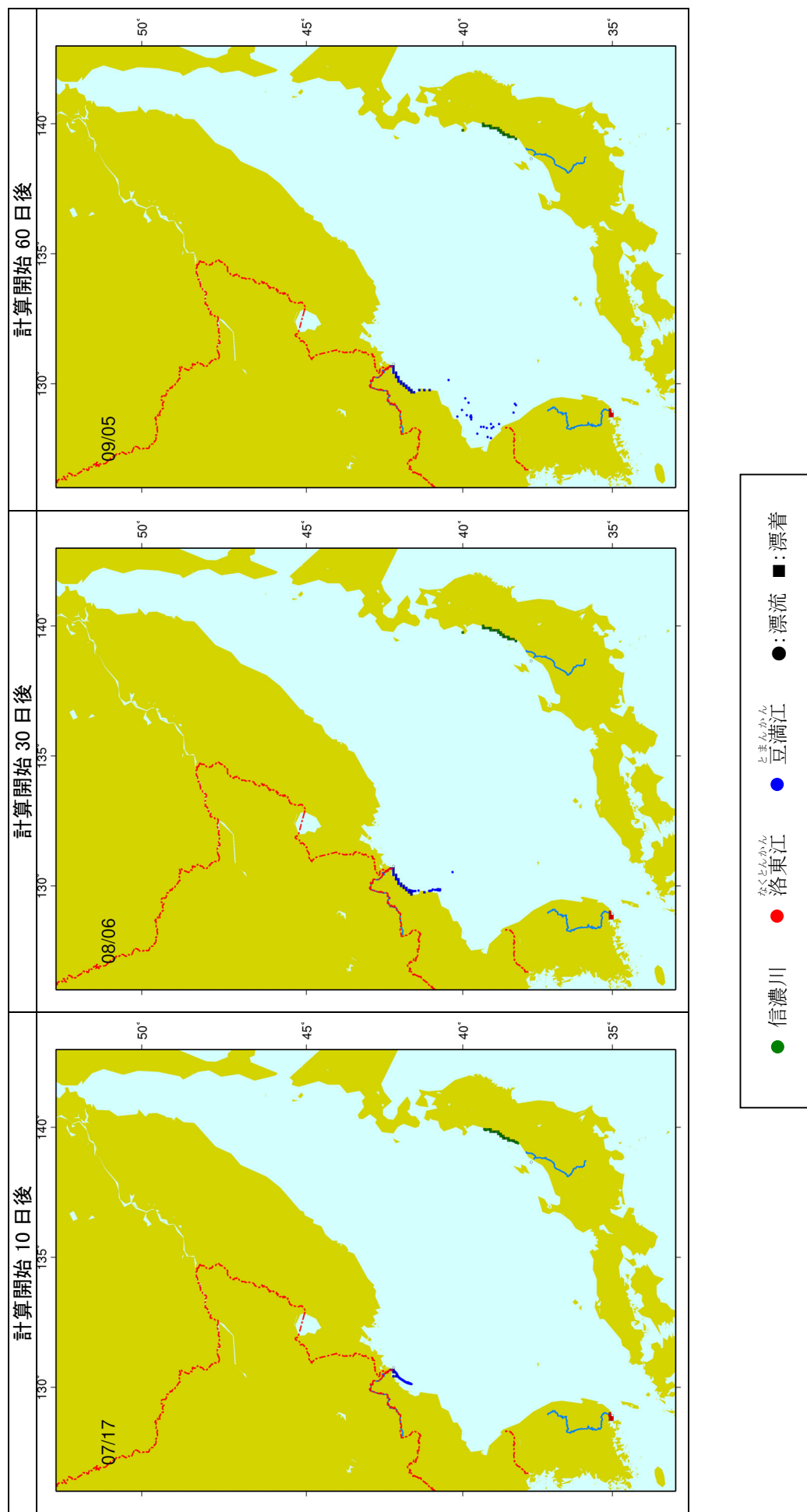


図-2.36(5) 河口流出を想定したゴミの漂流・漂着分布(2006 年出水時、ケース 3 空中:水中=1:1、計算開始から 10 日～60 日後)

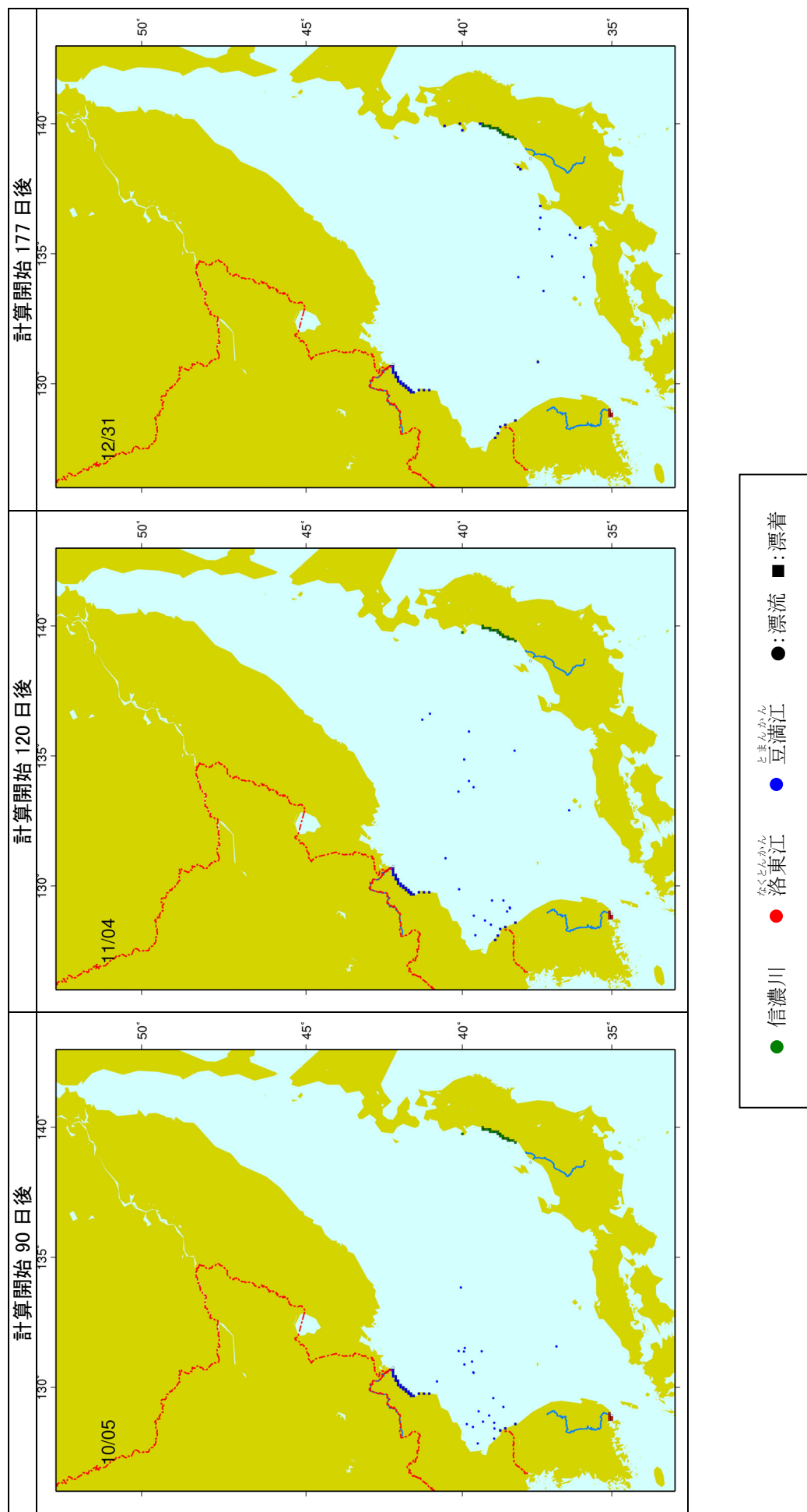


図- 2.36(6) 河口流出を想定したゴミの漂流・漂着分布(2006 年出水時、ケース 3 空中:水中=1:1、計算開始から 90 日～177 日後)

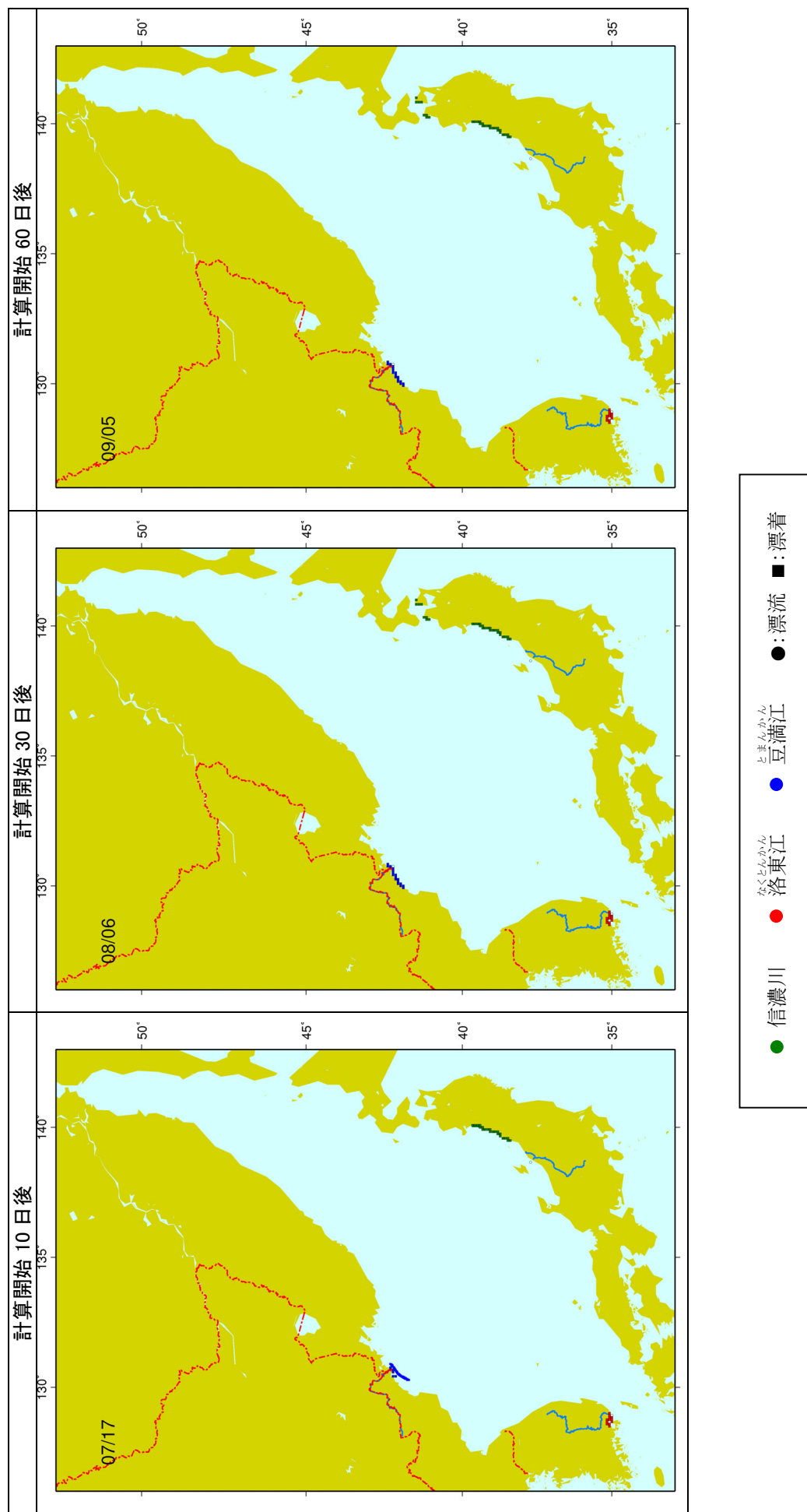


図- 2.36(7) 河口流出を想定したゴミの漂流・漂着分布(2006 年出水時、ケース 4 空中:水中=10:1、計算開始から 10 日～60 日後)

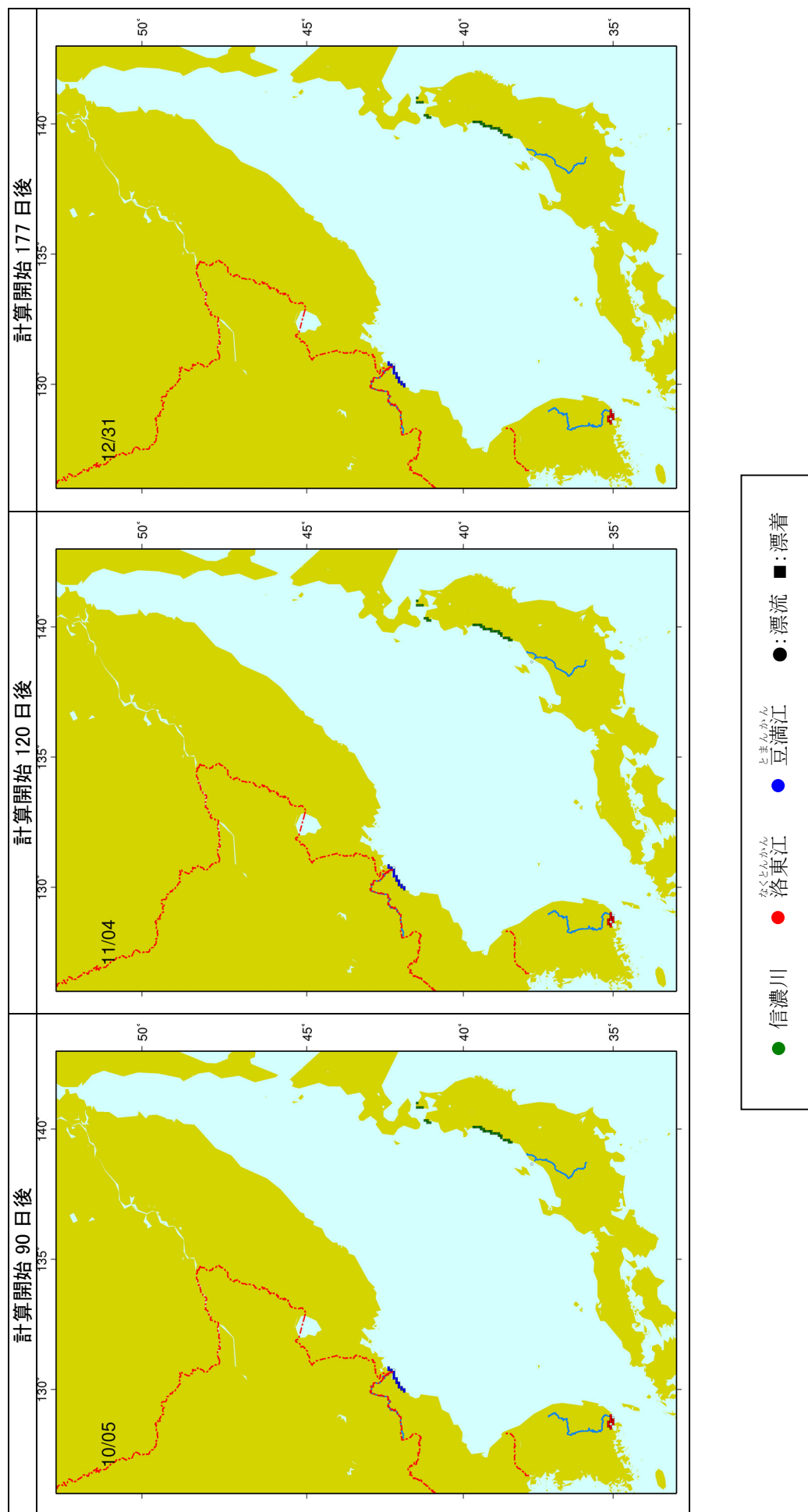


図-2.36(8) 河口流出を想定したゴミの漂流・漂着分布(2006 年出水時、ケース 4 空中:水中=10:1、計算開始から 90 日～177 日後)

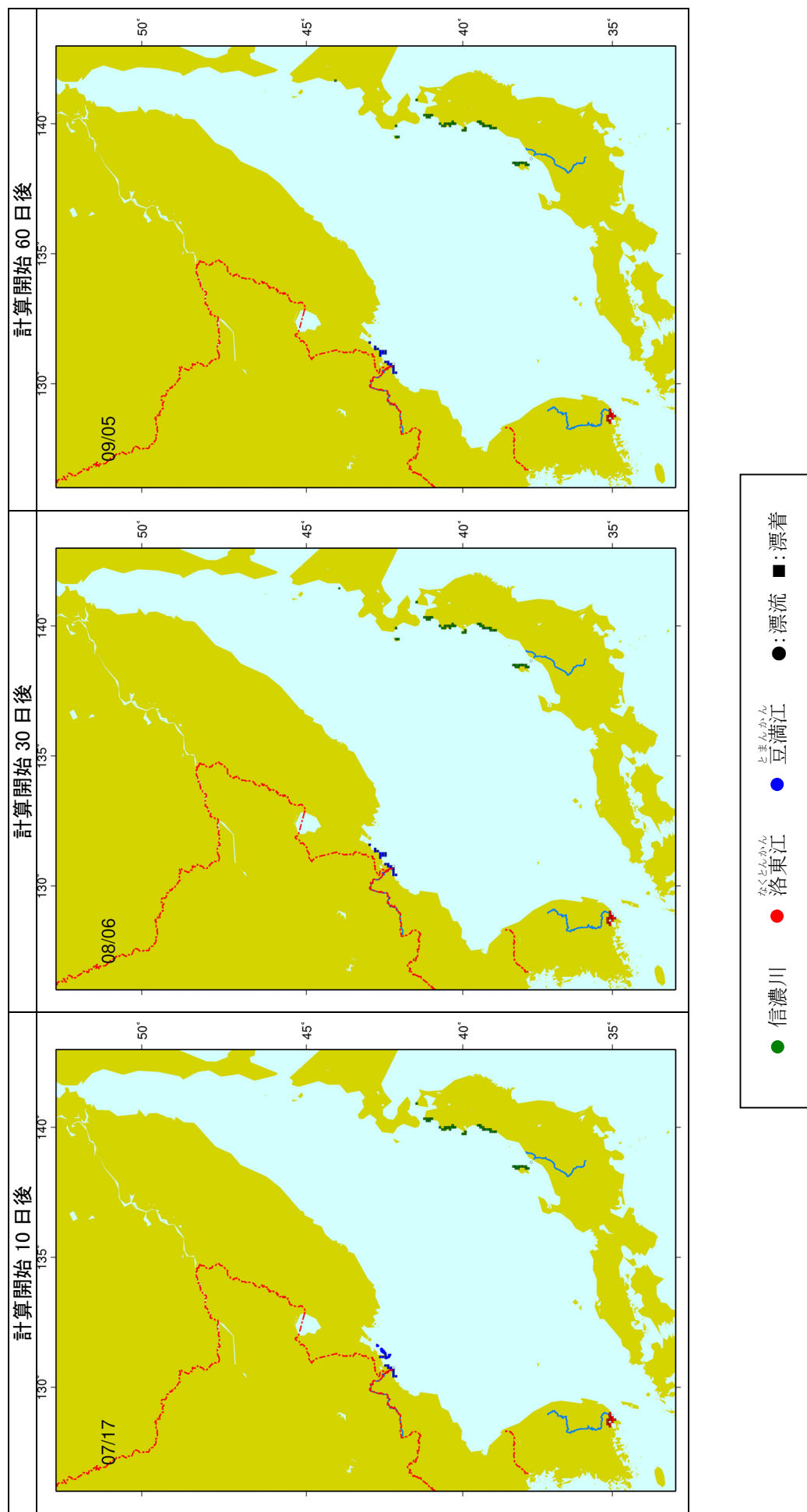


図-2.36(9) 河口流出を想定したゴミの漂流・漂着分布(2006 年出水時、ケース 5 空中:水中=100:1、計算開始から 10 日～60 日後)

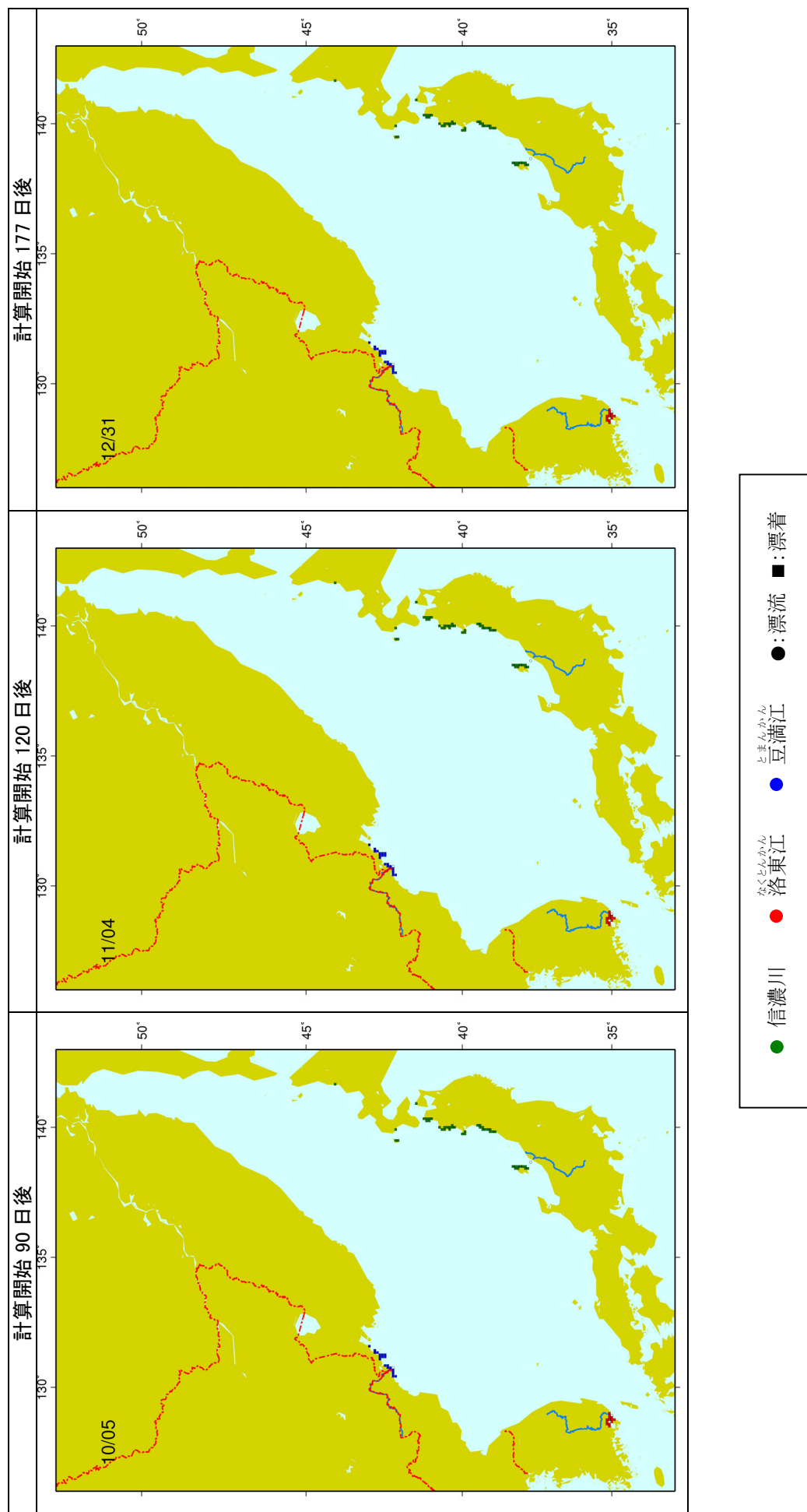


図-2.36(10) 河口流出を想定したゴミの漂流・漂着分布(2006 年出水時、ケース 5 空中:水中=100:1、計算開始から 90 日～177 日後)

2.7 東シナ海における漂流予測シミュレーションモデルの検討

2.7.1 検討目的

ここでは、東シナ海周辺から日本海へ流入する漂流ゴミの発生・漂流経路、流入量を推定することを目的として、東シナ海における海流・気象の概況を把握するとともに、流動予測計算を行い、その結果を日本海側を対象とした漂流予測モデルに反映させるための予備検討を行った。

2.7.2 計算準備

(1) 外力データの準備(流動場及び気象場)

海域の流動場は九州大学応用力学研究所が別途計算した RIAMOM の計算結果を用いる(以下、東シナ海流動モデル)。東シナ海流動モデルの諸元を表- 2.17 に示す。風系場は東シナ海を含んだ領域で作成した。

計算に用いた風系場と、流動場の計算結果を、図- 2.37 に示す。

表- 2.17 東シナ海流動モデルの諸元

項目	内容
計算範囲	117°E - 143°E 23°N - 53 °N
計算グリッド	1/6°
気象データ	NCEP/NCAR 1979-2000 年の気候値
水温・塩分	WOA

(2) 外力データの特性把握

1) 気象特性

冬季の風系場は、日本海海域においては冬季季節風に伴う強い北西風がみられ、風速は大きいところで 8m/s 程度である。東シナ海海域においては、風は概ね海岸地形に沿って吹いているため、東シナ海中央部(長江東沖)で北風、台湾付近では北東の風となっている。

春季の風系場は、3 月は冬季のなごりがみられるが、4 月、5 月になると風速は全体的に弱くなる。

夏季になると風系場は南風となる。対馬海峡付近では 7 月だけ日本海へ吹き込むようになる。

秋季になると日本海海域においては冬季季節風はまだみられないが、東シナ海海域においては北風が強くなり始める。

2) 流動特性

台湾の西から日本南岸沖にかけて黒潮に伴う強い流れが年間にわたってみられる。月によって流路を変えながら蛇行し、蛇行の形によっては渦(循環流)を形成する。

対馬暖流に着目すると、1 月、2 月にははっきりした流路はみられない。4 月に台湾海峡から北上し、一旦黒潮本流に取り込まれ、その後本流から分流する様子がみられる。8 月、9 月は台湾海峡を通過後、黒潮本流とは合流せずに北上する流路をみることができる。11 月、12 月にははっきりとした流路はみられなくなる。